

水産の窓

サバ類の漁況と秋漁の予測

3 - No.18
令和3年10月29日
茨城県水産試験場

1. 北部まき網サバ類水揚量の推移と資源状況

北部まき網によるサバ類水揚量は年によって大きく変動してきましたが、H25年に加入尾数が極めて多い卓越年級群が発生して以降は20万トン前後で推移していました(図1)。近年の加入状況は、H30年にH25年級群を上回る卓越した加入が見られるなど、良好に推移しています。しかし、資源増加の一方で、水揚量はH29年以降減少しています。これは、マサバの資源増加に伴い回遊範囲が沖合へ拡大したことによって、日本沿岸域にとどまる期間(漁期)が短くなっているためと推察されます。

今年の北部まき網による1~9月のサバ類水揚量は8.7万トンで、前年(6.8万トン)を上回っています。1~3月中旬までは好漁が続き、1~3月の水揚量は8.2万トンと前年の約1.4倍の水揚げがありました。しかし、3月下旬以降はマイワシ主体の操業となり、サバ類を対象とした操業は低調となっています。なお、道東沖でのまき網の操業は6月28日から始まりましたが、マイワシを対象とした操業であり、10月末現在サバ類は漁獲されていません。

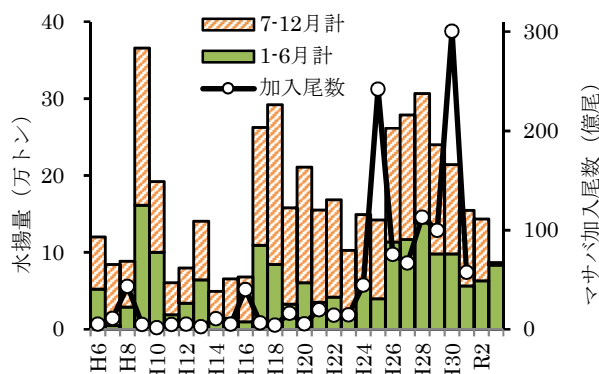


図1 北部まき網サバ類水揚量とマサバ加入尾数(令和3年水揚量は9月分まで)

2. 秋漁の漁況予測

①水揚量

北部まき網による1~6月のサバ類水揚量と9~12月のサバ類水揚量の間には正の関係があります(図2)。今年1~6月の水揚量は前年を上回る8.3万トンでしたので(図1)、この関係に基づくと今年の秋漁は11.2万トンとなり、水揚量は前年を上回る(前年7.6万トン)と予測されます。

②漁期

北部まき網による9~12月の秋漁におけるサバ類の漁獲状況を整理したところ、期前半には主にゴマサバが、期後半には主にマサバが漁獲されていました。さらに、秋漁が本格化し始める日(初漁期:9~12月の累計水揚量の20%を達成した日と定義)はゴマサバ資源量が多いと早く、マサバ資源量が多いと遅くなることになりました(図3)。近年はゴマサバ資源量の減少傾向、マサバ資源量の増加傾向が継続していることから、本格的な来遊は12月上旬となり、前年(11月下旬)よりも遅くなる見通しです。

③魚体

魚体については、今年の秋漁から加入尾数の極めて多いH30年級群が漁獲され始めており、マサバ体長26~36cm(体重200~650g、3歳以上)を主体に、18~28cm(60~250g、1歳魚、2歳魚)も漁獲されると考えられます。H25年以降に生まれたマサバは成長が遅れているものの、昨年12月に漁獲されたマサバの粗脂肪量は平均で15%程度あり、今秋も脂ののったおいしいマサバが期待できると考えられます。(回遊性資源部 荒井)

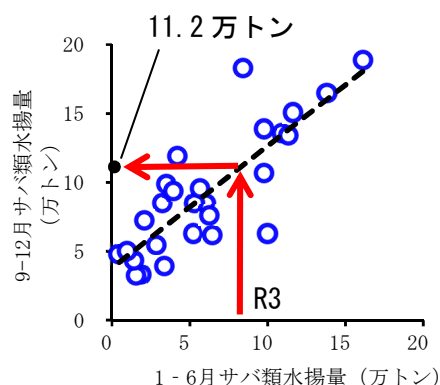


図2 北部まき網1~6月サバ類水揚量と9~12月サバ類水揚量の関係

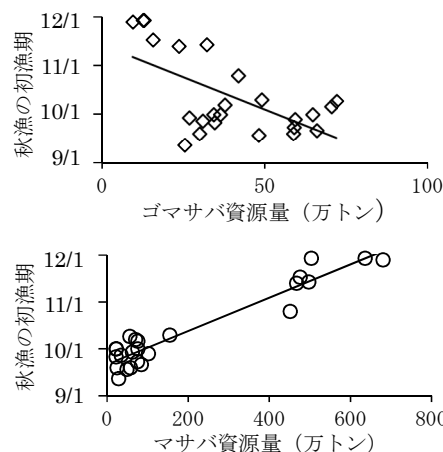


図3 秋漁の初漁期とゴマサバ資源量(上段)、マサバ資源量(下段)の関係

[次号予告] R3.11.12発行の「水産の窓」は、「令和3年11月の海況と今後の予測」を予定しています。